

---

**ユースクリーム・アイスクリーム**

様

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ユースクリーム・アイスクリーム

### 【コード】

N9398W

### 【作者名】

榛

### 【あらすじ】

暑いと冷たいものがおいしくなりますが、食べすぎにはご注意ください。

暑い夏の日、今日も誰かがどこかで冷たいものを食べています。シロップのかかったかき氷、冷たくて甘いアイスクリーム、キンキンに冷えたジュースやお茶、氷でキュツとしたそうめんやうどん。

ほら、あなたも心当たりがあるでしょう？

この夏、あなたは何度、冷たいものを食べましたか？

クーラーのきいた涼しいコンビニから炎天下のコンクリートロードに出てきた高校生の女の子は、ぎらぎらと照りつけるお日様を見上げました。

「あつっー……やっぱこんな日はコレに限る！」

そう言って女子高生がビニール袋からとりだしたのは、アイスクリーム。先程コンビニで買ってきたばかりのものです。ベリツと豪快に袋を開けて、まさにかぶりつこうとした瞬間。

「ねえ、冷たいものばかり食べてたらダメよ」

真っ白なワンピースを着た、見知らぬ女の人に止められました。この暑いのに二の腕まである白い手袋をはめ、顔には汗ひとつかかず、涼しげな表情をしています。

「……なんですか、あなた」

「私？ 冷たいものばかり食べてるあなたに、ちょっと忠告をしようと思って」

にっこりと女の人は笑うと、女子高生の手からするりとアイスを

取り上げました。

「あっ、あたしのアイス！」

せつかく買ったアイスを取られ、般若のような表情になった女子高生を気にすることなく、女の人は微笑みながら、女子高生の口元にぴんと立てた人差し指をそっと当てました。

「取り返しのつかないことに、なっちゃうわよ？」

手袋越しでもわかる、ひやりとした指が、女子高生の唇から離れていきます。

「……どういう、ことですか」

女の人に盗られたアイスから目を離さず、女子高生は尋ねました。涼しげな水色をしたアイスは、まだまだ暑さに負けず溶けるものかと頑張っているようです。

「暑いからって、冷たいものばかり食べてない？」

「そりゃ、暑いから……やっぱり冷たいもの食べたくないじゃないですか」

女子高生はむすっとした顔で、それでも律義に答えました。

「綺麗なシロップのかかったかき氷とか、冷たくて甘いアイスクリームとか、キンキンに冷えた飲み物とか、氷を浮かべたそうめんとか。私も好きで、よく食べてたわ。『暑いから』って言い訳して」

「人のこと言えないじゃないですか」  
ふふふ、と何を思い出したのか、ゆっくりと歩く女の人は静かに笑いました。

「そうね。でも、そういうあなたも心当たりがあるんでしょう？」

「……冷たいものばかり食べてたらね、そういうものしか体が受けつけなくなったの」

「典型的な夏バテですね」

「最初は私も夏バテだって思ったわ。……でもね、違ったの。そのうち、アイスクリームとか、かき氷とか、氷のように冷たいものしか口にできなくなったのよ」

少し俯き、悲しげな笑顔で女の人は言葉を切りました。近くの木

に止まっているのでしようか、たくさんの蝉の声が二人の間に沈む沈黙をかき消していきます。女子高生は黙って、アイスと女の人を見つめながら、次の言葉を待ちます。

「……冷たいものしか摂れなくなって、平熱がどんどん下がって。体調は悪くならなかったけれど……そのうちね、指先から、異変が起こっていったの」

女の人はそう言って、アイスを持っている手とは反対の手を、すうっと持ち上げました。真っ白な手袋をはめたその手は、見た限り特に異変はありません。日焼け防止によく売られているシンプルな白い手袋にも、その細くて折れそうな指にも、違和感はありません。「何が、あつたんです、か？」

いつの間にか話に引き込まれていた女子高生が、恐る恐る、問いかけました。

「……見たい？」

女の人はそう言い、一步、女子高生に近寄りました。

「え？」

「手袋を取れば、わかるわ。見てみたい？」

また一步、女の人が女子高生に近寄きました。純白の手袋の指先をつまみ、軽く引つ張ればするりと外せてしまいます。不思議な光を瞳にたたえた女の人が怖くなったのか、女子高生は一步、後ずさりしました。

「え、その……何があつただけ教えてくれれば……」

「……そう？ 見なくていいの？」

「えっと、聞いてから、で……」

「……わかったわ。教えてあげる」

女の人は女子高生に近付くのをやめると、手袋から手を放しました。そうしてふわりと花がほころぶように笑うと、女子高生のいる方に手を伸ばしました。

「指先からね……透明に、なっていくの」

「……とーめい？」

「ええ。形はあるんだけどね、向こう側が見えるくらい透き通って、冷たくなっていくの。まるでガラスや氷みたいに、ね……」

降り注ぐ日光に手をかざし、女の人は空を仰ぎました。何事もないように動くその手が、手袋の下でガラス細工のように透明だということとは、女子高生には到底信じられませんでした。しかし、先程唇に触れたその手の冷たさは、忘れられませんでした。

女の人の様子を見ていて、ふと、女子高生は気づきました。女の人の顔にかかる手の影が、ひどく薄いことに。地面にのびる女の人の足下の影が、薄いことに。女子高生の足元にはくつきりと、濃い影が広がっているにもかかわらず。

女子高生と目が合った女の人が微笑んだ瞬間、風が強く吹きましました。女の人が持ったままのアイスは、この暑さのなかしっかりと形を保ったまま、少しも溶けてはいませんでした。ぞくりと、女子高生の背筋を寒気が走りぬけました。

「きゃっ……きゃあああああああああああ……!!」  
それが合図だったかのように、女子高生は大声で叫ぶと走り去ってしまいました。蝉時雨のなかに残されたのは、白いワンピースの女の人と、水色のアイスクリーム。

「……やだ、そんなに怖がらなくても……。でも、冷たい物の食べすぎには気をつけなくっちゃね……。体が全部透明になったら、かなわないもの……」

ふふっ、と女の方は笑うと、ソーダ味のアイスに赤い舌を這わせました。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9398w/>

---

ユースクリーム・アイスクリーム

2011年11月1日02時12分発行